

「独創力を発揮するための三条件」

——糸川英夫博士の教え

的川泰宣氏 （宇宙航空研究開発機構<JAXA>名誉教授・技術参与）

ペンシルロケットの開発者であり、「日本の宇宙開発・ロケット開発の父」といわれるのが糸川英夫博士です。

2010年に小惑星探査機「はやぶさ」が小惑星「イトカワ」の試料を持ち帰ったというニュースを覚えている人も多いでしょう。その「イトカワ」の由来である糸川英夫氏こそ、日本における宇宙開発の歴史を切り開いた人物です。

その薫陶を受けた的川泰宣氏のお話を紹介します。

糸川先生はよく「独創力」の大切さについて話されていましたが、一般向けに行われた講演会でこんなことがありました。

先生は、幼い男の子を抱いて前の席で座っているお母さんに「その子を独創力のある子に育てたいと思いますか？」と聞かれました。

「もちろん」と答えたお母さんに、「そのためにあなたはどうか育てるつもりですか？」と聞くと、そのお母さんは「独創力を発揮するには自由でなければいけないから、この子がやりたいと思ったことは何でもやらせます」と答えました。

先生は天井を見てしばらく考えていましたが「あなたは数年すると、絶望するでしょうな」と言われたんです。

「何でも好きにやって独創力がつくのなら、チンパンジーには皆、独創力がある」と。

先生が続けて言われるには

「人間には意志というものがあって、自分はこれやりたい、という思いに、どこまでも固執しなければいけない」と。

いったんやりたいと思ったことは、絶対にやり遂げるという気持ちがなければ、やっぱり何もできません。

一度決心したことは、石にしがみついても、やり遂げる強い意志が必要だ、と第一に言われました。

第二には、過去にどんな人がいて、何をやったかを徹底的に学習しないとダメだ、と。

アインシュタインは、ニュートンのことを徹底的に学習して、ニュートンが考えることはすべて分かるという状態にまでなった。

そうやって初めて、ニュートンの分からないことが分かるようになったんです。

だから過去の人がやったことを決して馬鹿にしてはいけません。

これまで先人が残した考えの上に乗っかって、初めて新しいことが生まれる。

だから、徹底的に勉強しなきゃいけないと言われました。

第三は、少し意外だったんですが、自分が何か独創力のある凄い仕事をしたと思っていても、世の中が認めなければそのまま埋もれてしまうことになる。世に認められるためには、他の人とのネットワークをしっかり築いて、よい関係をつくっておくことが大事ですと。

先生はその後、「私は独創力と縁のないことを言っているように聞こえるかもしれないけれど、世の中の独創力はそうやってできてるんですよ」と話された。

先生はまさしくそれを貫かれたと思うんですね。

同時代の人がやっていることを真似るようなことは決してしないけれども、過去のことは非常によく勉強されていますよ。

糸川先生は、誰も考えなかったことを考えるのが大好きなんですよ。

でもその基盤には、自分が正当に継がなきゃいけな

いものを、物凄くしっかり勉強しているということがあるわけです。そして、他の人との良い関係。

その上に立って、初めて独創力が生まれてくるんだなということは、先生を見ていてよく感じました。

後日、ロケット開発チームの1人がこう書き綴っています。

「ロケット開発は、ある面から見ると人間学である、全く新しい技術を開発する過程では、その物を要求する側と製造する側の意志の疎通が大切で、これがないと、いい物ができてこない。糸川先生は科学や、技術も好きだったが、本当は人間が一番大好きだったような気がする。」

